

# 日本語論述授業における学生の学びの様相 —ピア・レスポンス, チェックリスト, 型を対象に—

Aspects of Student Learning in Japanese Essay Writing Classes:  
Focusing on Peer Response, Checklists, and Writing Templates

永井 涼子\*

NAGAI Ryoko

【キーワード】 ライティング, ピア・レスポンス, チェックリスト, 型

## 1. はじめに

ライティングは大学における学術的な活動の基盤をなすにもかかわらず、日常生活ではほぼ身につかないスキルであり、多くの大学で初年次教育の柱として重視されている（渡辺 2021）。山口大学国際総合科学部でも、2022年度よりアカデミックライティングを教える必修科目「日本語論述の理論と実践」を開講している。本科目では、日本語教育の知見を生かし、ピア・レスポンス（以下、PR）、チェックリスト、型（フォーマット）を取り入れている（永井 2025）。

しかし、これらの新たな取り組みについては、学生自身がどのようにとらえ、何を学び、何を問題と感じているのかについては明らかにされていない。そこで本稿では受講者全員を対象とした質問紙調査を行い、そこから各取り組みの意義と課題について明らかにすることを目的とする。

## 2. 授業概要

「日本語論述の理論と実践」の授業概要は以下の通りである。詳細については永井（2025）を参照されたい。

対象学生：山口大学国際総合科学部の1年生（必修科目）および留学生（希望者のみ）。約60名ずつの2クラスに分けて実施。

教科書：桑田てるみ（編）（2015）『学生のレポート・論文作成トレーニング 改訂版』実教出版  
授業回数：全8回（90分/1回）

## 3. 研究方法

本稿では、学生に実施した質問紙調査の結果より、PR、チェックリスト、型（フォーマット）の意義と課題について明らかにする。

### 3-1. 調査概要

本稿では、各取り組みに関する質問紙調査を実施した。なお、本調査の実施については、山口大学「人を対象とする一般的な研究」の審査で承認を得ている。

---

\* 山口大学国際総合科学部 nagair@yamaguchi-u.ac.jp

期間：2025年7月29日，8月1日

対象：「日本語論述の理論と実践」受講者121名。そのうち回答者95名から回答を得た（回収率約79%）。内訳は学部生95名，不明1名（留学生の回答なし）である。

方法：授業内で調査の趣旨を説明した後，質問調査紙を配布し，回答は任意とした。

項目：PR，チェックシート，型に関する選択問題（リッカート尺度および複数選択式）および自由記述問題

### 3-2. 分析方法

選択問題については単純集計を利用し，自由記述問題についてはテキストマイニングを実施した。テキストマイニングにはKH Corder 3 (version 3.03a)を利用し，頻出語リストの抽出，共起ネットワーク分析，および頻出語リスト上位10語に対するKWICコンコーダンスを使った文脈分析を行った。なお，学部生か留学生かが不明の1名分は除いた形で分析を行った。

## 4. 結果

### 4-1. ピア・レスポンス

PRとは「作文プロセスの中で学習者同士の少人数グループ（ペア，あるいはグループ）でお互いの作文について書き手と読み手の立場を交換しながら検討しあう作文学習活動」（池田2002:289）である。本科目では宿題について30分かけて読み合い，話し合う活動を実施した。

調査の結果，「PRをやってよかったか」という質問については，“とてもよかった”58人（61%），“よかった”37人（39%）であり，全員がPRを好意的に評価していることが明らかになった。

「PRを実際にやってみてどうだったか」という質問（複数回答可：割合は異なり人数で算出）については，最も多かった回答は“他の人の小論文を読むことは参考になった”74人（78%）であり，次いで“他の人からコメントがもらえるので助かった”66人（69%），“他の人に読まれると思うと，普段より気を付けて宿題を書くようになった”45人（48%），“相手の修正部分を見つけるのが大変だった（わからなかった）”44人（47%）であった。ピア・レスポンスは相手のためにコメントをする活動であるが，学生は自分のためになったと捉えていることが伺える。

「宿題の提出前に，自分でレポートを読み直すようになったか」という質問については，“いつもするようになった”58人（61%），“時々するようになった”37人（39%）であり，“全然しなかった”という回答は0人であった。PRがあるため，自分の文章が読まれるという意識が強く働き，提出前に読み直すという行動につながっていると考えられる。

PRについての感想（自由記述）をKH Corderを使って分析したところ，頻出語リストについては以下の表1のようになった。

表1 PR：頻出語リスト（上位10語：左から上位順）

抽出語	自分	人	読む	レポート	気	書く	見る	文章	ピアレビュー	指摘
出現回数	44	22	17	15	15	14	12	12	11	10

表1からPRはレポートを読み合う活動であるため，自分や相手，文章やレポートといった活動の対象に意識が向いていることがわかる。

表1の抽出語についてKWICコンコーダンスを用いて文脈分析を行ったところ，以下のような

特徴がみられた。まず、「自分」については「自分では気づけなかったポイント」「自分とは異なった視点」と自分とは異なるという文脈で使用していることが多い。「人」は「他の人」がほとんどであり、他の語彙は総合的に A) 自分の文章が読まれることと、B) 相手の文章を読むことにコメントが分かれた。A) 自分の文章が読まれることに関しては「よかった」「丁寧に書くようになった」「指摘してもらってよかった」と肯定的な評価がほとんどであった。「最初は不安だった」という意見もあったが、「やってみてよかった」と締めくくられていた。また、B) 相手の文章を読むことについては、「参考になった」という文脈で使われることがほとんどであった。以上より、PR について、自分の作文が読まれることについては指摘が助かる、相手の作文を読むことは参考になると捉えていると言える。また、「他の人の文章の方が添削しやすい」という意見もあり、自己推敲の準備活動として位置づけている PR がその役割を果たしていることも伺える。

共起ネットワークからは、「指摘は助かる」「修正する時の参考になる」「良いレポートにつながる」「客観視する癖を取り入れる」と感じていることが明らかになった。これより、PR を通して相手の意見を取り入れ、修正に役立てるだけでなく、相手の文章のいいところに目を向けてそこから学ぶといった双方向の学びにつながっていることがわかる。

#### 4-2. チェックリスト

チェックリストとはそれまでの授業で学んだ項目（現段階でクリアしておくべき項目）をリスト形式に並べたものである（永井 2025）。学生はそれにチェックを書き込みながら PR を行う。

調査の結果、「チェックリストがあることによってピアレビューは進めやすくなったか」という質問については、「とてもそう思う」87人（92%）「そう思う」6人（6%）、未回答2人（2%）であった。なお未回答についてはその後の質問が全て未回答であること、この質問から質問紙の裏面に移っていることから、裏面を見落とした可能性がある。この結果からほぼ全ての学生がチェックリストが PR の活動に役立っていると考えている。チェックリストを使うタイミングを問う質問（複数回答可、割合は異なり人数で算出）については、「宿題を書くときに使う」40人（42%）、「提出前に自分の宿題を確認する時に使う」37人（39%）が多いものの、「使ったことがない」26人（27%）もあり、PR のための資料でもあることから授業外での使用は限定的である。

次にチェックリストの感想（自由記述）について KH Corder を用いて分析した。頻出語リストは以下の表 2 の通りである。

表 2 チェックリスト：頻出語リスト（上位 10 語：左から上位順）

抽出語	チェック	リスト	レポート	確認	自分	書く	気	思う	使う	授業
出現回数	17	11	8	8	8	8	7	6	5	5

チェックリストという語、レポートや確認といったチェックリストを使った活動に関わる語等、チェックリストそのものに関する語が多い。一方で、相手の作文を確認するためのリストであるにもかかわらず「自分」「書く」という語が上位にあり、自分自身がレポートを書くときにも使っていることが伺える。

表 2 の抽出語について KWIC コンコーダンスを用いた文脈分析を行ったところ、結果は総合的に A) 便利、B) 他への応用、C) 自分への自信の 3 つに大別できる。A) 便利については、「どこに注意すればいいかわかった」「確認しやすい」「書きやすい」「使いやすい」という意見が見ら

れ、授業で学んだ項目がリスト化されていることからそれを意識しやすくなっていることがわかる。B) 他への応用については「他のレポート／課題／授業でも使いたい／使っている」という内容がほとんどであった。現在使っているという意見もあったものの、将来的に使いたいという意見も多かった。これはチェックリストが授業で学んだことを回を追うごとに積み上げていくものであり、他のレポートで使うためには最終的な形（期末レポート用のチェックリスト）のほうがよいと判断したのではないかと推察される。C) 自分への自信については、「自分の成長したところがわかる」「レポートに自信が持てた」などがあげられた。リスト化されているところから、自分ができる／できるようになったところが可視化され、自信へとつながっていると考えられる。

共起ネットワークからは、チェックリストを「書くときに気を付けるポイントがわかる」、「自分で見直すときに助かる」、「自分の足りない部分がある」、「明確な基準をもって取り組み、それが修正へとつながっている」ととらえていることが明らかになった。授業で学んだことがリスト化されて明確に示されることで自分の文章をふり返るときの指標になっていることがわかる。

#### 4-3. 型（フォーマット）

本科目では「レポートの型」を明示的に教え、それを宿題用のフォーマットの形としてまとめ、それに書き込む形を取ることで、毎回宿題に取り組む際に「どこに気を付ければよいか」がわかるような仕組みを取り入れた（永井 2025）。

調査の結果、「宿題のフォーマットがあっただけよかったか」という質問については、「とてもよかった」84人（88%）、「よかった」8人（8%）、「あまりよくなかった」1人（1%）、未回答2人であった。ほぼ全ての学生がフォーマットがあっただけよかったと考えていることがわかる。「フォーマットがあることによってどのような影響があったか」という質問（複数回答可：割合は異なり人数で算出）に対しては「レポートが書きやすくなった」84人（88%）、「授業で習ったことを意識して宿題が書けるようになった」65人（68%）、「レポート（宿題）を書くときの心理的な負担が減った」33人（34%）と大半が肯定的な回答であった。マイナスの影響である「注意事項がたくさん書いてあったので、負担感が増した」は5人（5%）であり、「自分の思った通りに自由に書けない気がした」は0人であった。このフォーマットは初年度に実施を見送っているが、それは「学生の文章を型に当てはめることで、文章を書く際の自由が奪われるのではないか」といった懸念からであったが、それは杞憂であることが明らかになった。「このフォーマットはこの授業以外（他の授業やPBL等）でも役に立ちそうですか」には79人（83%）が「とてもそう思う」、13人（13%）が「そう思う」と回答していることから、このフォーマットが本科目だけの限定的なものではなく、他のレポートの執筆にも役立てられていくことが期待できる。

感想（自由記述）の結果をKH Corderで分析した。頻出語リストは以下の表3の通りである。表3からレポートを書くときに型（フォーマット）を利用していることが伺える。各語をKWICコンコーダンスを用いて文脈分析を行うと、総合的に、A) 書きやすさ、B) 負担感の軽減、C) 理解度の向上、の3点にまとめることができる。A) 書きやすさについては、特に序論等の書き始めにそれを感じている感想が散見された。一方で、フォーマット内は注意事項をあえて青字で記載していたが、本文を書くときに色の変更をしなければならず書きづらいという意見もあった。B) 負担感については、「書き方を迷わなかったので取り組みやすかった」「取り組むハードルが低

くなった」「安心感が違う」といった意見が多く、型として提示することにより物理的な書きやすさだけでなく、心理的な負荷軽減にもつながっていることが明らかになった。C) 理解度の向上は「この授業まではわからなかったが、わかるようになった」という意見がほとんどであった。

表3 型（フォーマット）：頻出語リスト（上位10語：左から上位順）

抽出語	書く	レポート	フォーマット	授業	自分	ほか	書き方	付ける	分かる	沿う
出現回数	40	22	21	8	7	6	6	6	6	5

共起ネットワークからは型（フォーマット）について、「論文の型が身につく」「形式を意識して書ける」「宿題に取り組む際に役立つ」「困っているときに助かる」ととらえていることが明らかになった。学んできたことを「型」として意識すること、それが論文執筆に役立つということを実感していることが伺える。

## 5. おわりに

本稿では学部1年生向けのアカデミックライティング科目「日本語論述の理論と実践」において取り入れている、PR、チェックリスト、型（フォーマット）が学生にとってどのような意義と課題があるのかを質問紙調査をもとに分析・考察した。その結果、PRについては「自分の文章には読み手がいる」という文章作成の基本を意識するようになり、相手のいいところや相手の指摘を積極的に取り入れて活用している姿勢が見て取れた。チェックリストについては、リスト化されることによりPRがやりやすくなっただけでなく、自分ができるようになったことが可視化され、文章作成に対する自信へとつながっていることも明らかになった。型（フォーマット）については、特に文章の書き始めが書きやすくなっており、文章作成に対する心理的負担感も軽減できることが示唆された。一方で、型（フォーマット）については表記の方法について検討の余地があることも明らかになった。総合的に各取り組みを学生は学びとして取り入れられていることが明らかになったため、今後はそれをより効果的にできるような工夫を重ねていく必要がある。

### 【参考文献】

- 池田玲子（2002）「第二言語教育でのピア・レスポンス研究：ESLから日本語教育に向けて」『言語文化と日本語教育』増刊特集号，pp.289-310
- 永井涼子（2025）「学部生向けのアカデミックライティング教育：日本語教育の知見を活かした試み」『山口大学国際総合科学部研究紀要』1，pp.61-65
- 樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』（数理社会学会）19(1) pp.101-115
- 渡辺哲司（2021）「頭のチューニング」春日美穂他（著）『あらためて、ライティングの広大接続 —多様化する新入生，応じる大学教師』pp.1-10 ひつじ書房